



Title	『ライン河』におけるルイ16世のイメージの効果
Author(s)	黒川, 彩子
Citation	Gallia. 2026, 65, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104475
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ライン河』におけるルイ 16 世のイメージの効果

黒川 彩子

1842年、ユゴーは「序文」と25通の書簡、そして仏独が平和的に手を結び、英露の野望に対抗することを訴えた「結論¹⁾」18章で構成された『ライン河—ある友への手紙』を発表した。この紀行文は旅行中にユゴーが友へ送った手紙という体裁をとるが、1838年と40年の旅の間、妻アデルに送った手紙と旅行記を基に41年パリで書き上げたものである。25通中22通が40年の旅の書簡だが、冒頭に38年の手紙が3通入ることで、全ての日付が38年で統一されてしまった。また旅程も東へ向かっていたユゴーが第4の手紙で急に西に戻るという奇妙なものになっている。38年の手紙の挿入についてジャン・ゴードンは「1838年の書簡のより軽やかな調子は、まさしくライン河地方を描く箇所のドラマティックな質を際立たせることにしかならないだろう²⁾」と言うが、果たしてそれだけだろうか。本論では冒頭3通の1838年の手紙の効果を明らかにするために、まず時代背景を確認し、38年の旅程に注目してから、その旅に関わるルイ16世のユゴーにおけるイメージを分析して、3通の手紙の『ライン河』全体での役割を解明したい。

1. 消された「1840年」

38年の旅を冒頭に挿入した理由について、第一に考えられることは仏独が協同してヨーロッパを先導する未来を描いた結論へ導くために、1840年という年号を意図的に削除したということだ。ユゴーは1840年8月29日から11月1日までライン地方を旅したが、この時期、国際情勢は緊迫していた。特にトルコ・エジプト間ではシリアの領土をめぐり緊張が高まっていた。フランスはエジプトに近寄り、単独でこの事態の收拾を目指す、その努力は他の列強のせいで水泡に帰す。7月15日のロンドン条約で、エジプトはオスマン帝国との宗属関係を維持、代わりにムハンマド・アリーの世界が認められ、フランスはそれまで維持してきたエジプトでの影響力を失う。これはナポレオンの記憶の場を失うことと同義である。七月革命の円柱がバスチーユ広場に建てられた7月28日の翌日、イギリス・プロイセンに対して、市民たちは七月革命の死者の遺品を持ち、ラ・マルセイエーズを歌っての抗議表明を行った。2国に対する不満は、ライン左岸へと向いていく。1815年イギリスの策略でプロイセン領に編入されたライン左岸は、もう一つのナ

1) この「結論」は、後にユゴーがその必要性を主張する「ヨーロッパ合衆国」Hugo, «Congrès de la paix à Paris, discours d'ouverture, 21 août 1849», in *Actes et paroles I*, Bouquins, 2008, p. 299-304へと繋がる思想とも見做される。

2) Jean Gaudon, «Présentation», in *Œuvres complètes de Victor Hugo (OC.)*, Tome VI, Le Club français du livre, 1968, p. 175.

ポレオンの記憶の場でもあるからだ。首相ティエールはライン河辺境の回復と左岸の再統合を要求し、彼に続いていくつもの新聞がライン左岸の回復を求めた。ティエールは8月5日に予備軍を招集し、国境付近に軍を動員する。このフランスの敵意に対してプロイセン側も黙っていない。同年ニコラウス・ベッカーは9月18日付の「トーリア」紙にて「ドイツのライン河の歌」を発表する。この歌でそれまで一枚岩ではなかったプロイセン領内の感情が1つになり、連帯が強まることになった。

このように激しい愛国心と敵愾心が生まれる中で、ユゴーはドイツ圏を旅したが、『ライン河』でフランスに対する明確な敵意に言及する箇所はない。それどころか41年に書いた序文では「ドイツ人がそう考えるよりもライン河はずっとフランス的であり、フランス人がそう考えるよりもはるかに、ドイツ人はフランスに敵意がない³⁾」とわざわざ現在形を用い、自身の主張がさも真実であるかのように記している。ジャン・ゴードン⁴⁾は、当時ライン地方を旅していた作家たち⁵⁾と比べ、ユゴーの旅を「古代と夢想への逃避⁶⁾」と形容し、作家は実際のドイツ地方について調べることも、見ることもしなかったと指摘した。現実にあふれていたはずの敵愾心が描かれないことで、「結論」でユゴーが主張する独逸の連合が可能であるような印象を植え付けることに成功している。しかし1840年という年号を隠蔽したいのであれば、書き換えさえすればいいのである。ユゴーはなぜドイツ圏へ行かなかった38年の旅をあえて『ライン河』の冒頭に入れたのだろうか。3通の手紙の必要性をその旅程から考えたい。

2. ルイ16世のイメージ

1838年の旅を挿入することで、ソワソンからランスを経由してジヴェへと向かう旅が、ラ・フェルテ・スー・ジュアールからシャロンを経由してヴァレンヌまで到着したところで、第4の手紙から急遽ヴィレル・コトレへ後退し、そこからジヴェへ向かう旅に変更された。国境を目前にして、「話すことでもないことが起こり、急遽⁷⁾」戻ったとあるが、その距離約150kmである。つまり第3の手紙と第4の手紙の間には旅としての断絶が存在するのである。また1838年の旅ではヴァレンヌの後、ヴージュまで移動するが、この箇所の手紙は『ライン河』では結局採用されなかった。これらの結果、初め3つの手紙が、独立したヴァレンヌまでの旅を描いたような印象を与えている。つまり、ユゴーはライン河の旅の冒頭として、ヴァレンヌへの旅を挿入したのである。

ではなぜヴァレンヌなのだろうか。第1から第3の手紙で通過するラ・フェル

3) OC., Tome VI, p.196.

4) Evelyn Blewer は Victor Hugo, *Œuvres complètes, «Voyages»*, Bouquins, 2002 の注の中で『ライン河』が現実世界の動きと関わりが弱いことを述べている。

5) 1820年から40年にかけて多くの作家(デュマ、ネルヴァル、サント・ブーヴ)、歴史家(キネ、クーザン、ミシュレ)、芸術家(プーランジェ、ダヴィッド・ダンジェ)などがラインへの旅を行っている。OC., Tome VI, p. 180.

6) OC., Tome VI, p. 181

7) OC., Tome VI, p. 219-220.

テ・スー・ジュアール、モンミライユ、シャロンからヴァレンヌは1791年にルイ16世が辿った道である。ユゴーはラ・フェルテ・スー・ジュアールからヴァレンヌまでの道を、他の区間のように乗合馬車や郵便馬車を使うのではなく、貸馬車を用い、まるで王の後を追うように進んでいく。そして最後のヴァレンヌでルイ16世について語る。こうしたことから、ユゴーにとってのルイ16世のイメージが1838年の旅の挿入と深く結びついていると推察される。ユゴーにおけるルイ16世を考察する。

革命下で風刺されたルイ16世は、王政が復古するやいなやイメージの回復が図られる。ルイ18世はすぐさま兄夫婦の遺骨を掘り出し、在位中1月21日の命日には盛大な儀式を催した。それと同時に、ルイ16世にキリスト教的殉教者のイメージを絡め、広める。フランスの罪をかぶり、命を落とした王というイメージで、このようなルイ16世は祈祷、聖歌、詩節、演説などに現れていく⁸⁾。しかし、早くも1816年には称賛する文章は減少を見せ、命日の盛大な儀式も、七月革命後に消滅する。そのためか『19世紀ラルース』を引くと、「性格も知性も極めて凡庸」であると形容され、ユゴーも『九十三年』(1874)執筆時には「良くもなく悪くもない王⁹⁾」と覚書の中で書く。凡庸で何事にも関心を示さない鈍い王。今も残るマイナスのイメージを共有していたのだ。ユゴーの描くルイ16世を確認しよう。

テーブルの上にはたくさんの料理が並んでいた。王だけが食欲旺盛に食べていた。突然扉が開き、手に松明や槍を持った一団が乱入してきたとき、王は右手をワインの上に置き、まるで今にも飲むために注ごうとしているようだった。そして王はしばらくの間、その姿勢でいた¹⁰⁾。

これは『ライン河』出版と同年の1842年に書かれたとされるヴァレンヌ逃亡中の王を描いたものだ。他の同乗者たちが、成功か失敗か、不安の渦中にあるというのに、ルイ16世は一人食欲旺盛に食事中だ。そこへ武装した一団がなだれ込んでくるが、その時も王はワインの瓶に右手を添えている。1791年から流布した「現代版ガルガンチュア家族の元君主による会食」というルイ16世一家の風刺画や1831年に発表されたドーミエの『ガルガンチュア』に見られるように、「食べる」王は、民の税金を食い尽くす専制君主のメタファーとして用いられる¹¹⁾。ユゴーは、王の息子のルイ17世には殉教者のイメージを付与したが、ルイ16世には与えていない¹²⁾。『ライン河』の「結論」で、ルイ16世はただ「同情するだけ」の王だと述べる。ところで、この同情するしかない王を、ユゴーは一時期舞台に上げようと考えていた。『クロムウェル』発表後の1829年に書かれた「制作予定

8) ジャン＝クリスチャン・ブティフィス『ルイ十六世』下巻、小倉考誠監修、2008年、p. 575。

9) OC., Tome XV-XVI/1, p. 535.

10) OC., Tome XV-XVI/1, p. 535.

11) Annie Duprat, *Les rois de papier La caricature de Henri III à Louis XVI*, Belin, 2002, p. 54-59.

12) 『オードとバラッド』の「ルイ17世」では、死にゆくルイ17世とキリストの殉教が重なるように描かれる。

戯曲リスト¹³⁾」には、「アンギャン公の死」と「チャールズ1世」に挟まれて「ルイ16世」の文字が確認できる。これら3作は結局戯曲化されなかったため、不明な点が多く、わかるのはリストで「ルイ16世」の上に書かれている「アンギャン公」の副題「ボナパルトの正当性」からユゴーの関心が政治的な殺人であったこと、そして「ルイ16世」と「チャールズ1世」が並んで書かれているため、断頭に関心があったことである。実際、わずかに残された戯曲の断片は「ルイ16世の死」というタイトルを持ち、最後は断頭の場面を用意していたようである。断片の一つを確認しよう。

オルレアン公とボナパルト（砲兵隊の少尉）が同じ居酒屋にいる。

ある人

ルイ16世の後を継ぐものがここにいる。

ボナパルト

そう思います¹⁴⁾。

ボナパルトの階級が「砲兵隊の少尉」とあるので、ヴァレンヌ逃亡の年である1791年より前の会話である。ボナパルトとオルレアン公は同じ居酒屋にいる。そこに誰かがルイ16世の後継者がここにいると語る。これに答えるのは王族であるオルレアン公ではなく、ボナパルトである。これらの短いやりとりからも、この戯曲の主題がルイ16世の死を昇華し、殉教者のイメージを広めようとしたものではないことは明らかだろう。王政復古下では、革命から時間が離れていなかったことや自由に制限があったことから、革命を語ること、特に王の死、ナポレオンを戯曲化することは困難であったという。そのため、多くの作家は王の首を落としたという類似点から、クロムウェルを描こうと試みた。ユゴーもその流れの中、1827年に『クロムウェル』を世に送り出すが、そのわずか2年後に「危険¹⁵⁾」であり「不可能」とみなされていたルイ16世を、同じく「危険」とされていたボナパルトともに描こうとしていたのだ。

この場面についてアンヌ・ユーベスフェルドは「正統後継者」と「彼に続く力¹⁶⁾」という言葉を使い、ボナパルトがルイ16世の継承者でなかったために制作を中止したと述べる。これは戯曲の制作中止を宣言する手紙に根拠がある。1831年9月、ユゴーは劇作家コルドゥリエ・ドラヌーへの手紙の中で次のように述べる。

... チャールズ1世、私はクロムウェルと名乗ります。

私のものには、この偉大さが何もありません。ボナパルトはこの詩句をルイ

13) OC., Tome III, p. 1171.

14) OC., Tome III, p. 1131. 七月革命の前に書かれたかは不明。

15) Jean-Marc Hovasse, *Victor Hugo tome I, Avant l'exil 1802-1852*, Fayard, 2001, p. 326.

16) Anne Ubersfeld, *Le Roi et le Bouffon*, José Corti, 2001, p. 38.

16世に言わないですし、ボナパルトはルイ16世を殺してはいません¹⁷⁾。

当時、コルドウリエ・ドラヌーは清教徒革命時の貴族ストラフォードを主演にした戯曲を制作中だったが、ユゴーの作品にはその中で描かれるチャールズ1世とクロムウェルの関係性にあるような「偉大さ」がない、つまりボナパルトがルイ16世の弑逆者ではないゆえ「交代」が成立しないとして制作を中止したとある。コルドウリエ・ドラヌーは1835年に『チャールズ1世とクロムウェル』という題でこの戯曲をサン・マルタン座で上演するが、その中では捕らえられていたクロムウェルとチャールズ1世が一瞬で立場を逆転させる場面がある。確かにナポレオンはルイ16世の処刑とは無関係なので、このような場面を描くことは困難だろう。さらに、30日の手紙でユゴーは「ルイ16世を他の犠牲者のためにすでに諦めた¹⁸⁾」と戯曲の制作中止が決定的であると述べる。そして「ルイ16世」を完全に諦め、代わりに書き始めたのが1832年に発表する『王は楽しむ』である。ここでは道化のトリブーレが、フランソワ1世の命を狙うことになる。「笑い」を基軸に王が道化に、道化が王に入れ替わる物語であることは以前拙論で示した¹⁹⁾。これらを考慮に入れば、ユゴーは「交代」に関心を持っていたと理解できるだろう。チャールズ1世とクロムウェルにはあり、ルイ16世とボナパルトにはない関係性こそ、この「正統継承者」から「彼に続く力」への「交代」と言えるのではないだろうか。

ユゴーにとってルイ16世とは、民を「食い尽くす王」であり、「交代」される側に立つ、古い権力者である。以上の点をふまえて『ライン河』におけるヴァレンヌまでの旅路の最後の手紙、第3の書簡で描かれるルイ16世を確認する。

(…) ルイ16世が逮捕されたのがこの広場で、鐘楼を通り過ぎて、広場の隅にある黄色い家の前でした。王の馬車は、広場が形作る三角形の斜面に沿っていました。私たちの馬車も同じ道をたどりました²⁰⁾。

王の馬車はヴァレンヌのサン・ジャングー教会を通り抜けたところで、サント・ムヌーから駆けつけてきたドルーエによって足止めを食らう。家の色は不信を示す黄色。三角形の斜面にあたる道というのは現在のルイ16世通りのことで、国王一行はこの道を下り、橋を渡ってモンメディを目指す予定であった。ユゴーはルイ16世がしたように、馬車から降りて、逮捕現場近くの広場を眺める。そして数か月で、その広場は恐ろしいもの、つまり「革命の広場になった」と述べる。この小さな広場は歴史的には大きな広場である。ヴァレンヌ逃亡から数か月後、絶対王政は立憲王政へと変貌する。ユゴーは「物質的な自然は時折、特異な象徴的表現をする」として、逮捕現場をさらに描写する。

17) OC., Tome IV, «V.H. à Cordellier-Delanoue, le 25 septembre 1831», p. 1049.

18) OC., Tome IV, «V.H. à Cordellier-Delanoue, le 30 septembre 1831», p. 1049.

19) Ayako Kurokawa, «L'effet du rire dans Le Roi s'amuse», in *Gallia*, No. 52, p. 31-39, 2013.

20) OC., Tome VI, p. 211.

ルイ 16 世はこの時、危険でさえある坂を猛スピードで下っていたのです。私の二輪馬車の主馬は危うくそこで転倒するところでした。(…) 今日ヴァレンヌの宿命的な三角形の広場を通ります。そこは、ギロチンの歯の形をしているのです²¹⁾。

ユゴーは自然が作り出した形が、宿命的な運命を象徴しているとして、急坂とその途中にある三角形の広場を描く。退位、斬首へとむけて「坂を猛スピードで下る」ルイ 16 世の運命を決めたのは、「ギロチンの歯の形」をした広場であった。さらにこの文章に続いて、「ドルーエを補佐し、そこでルイ 16 世を捕らえた男はピローといった。－なぜピヨではないのか²²⁾」と 41 年に加筆する。ルイ 16 世をギロチンへと導いたドルーエの補佐の名が「Billaud」ではなく「Billot」、つまり「断頭台」という名前でなかったのかと問い、ここでもルイ 16 世と「斬首」というイメージを強調している。『ユゴー事典²³⁾』によると、ユゴーはルイ 16 世に関して作品の中で、ヴァレンヌ逃亡とギロチンについてのみ言及したとある。『九十三年』でも、性格などを記した覚書に反して、述べられるのは逃亡と断頭である。これはユゴーにとってルイ 16 世が終わりの王であり、「彼に続く力」に交代されるべき王だったからではないか。それを証明するように、38 年でも 40 年でも立ち寄ったランスをユゴーは書簡から切り取り、ただ経由したと名前を挙げるに留まった。戴冠式、つまり王政の始まりの地であるランスの描写を避けることで、ヴァレンヌの旅による「終焉」はより強調されているのだ。『ライン河』は終焉を内包した王の最後の旅を描くことから始まるのである。

最後にユゴーのルイ 16 世のイメージに、もう一つの要素が追加されている可能性について触れたい。広場を下った後の描写である。

私はルイ・フィリップの肖像画が飾られた「大王」という看板を掲げたとても古い宿に、泊まれないかと尋ねました。おそらくそこでは 100 年もの間、ルイ 15 世、ボナパルト、シャルル 10 世を代わる代わる見てきたのです。48 年前、この町が王の馬車の行く手を阻んだ日、この扉に、今日でもまだ壁には古い歪んだ鉄の枝が打ち付けられています、そこに吊るされていたのは、おそらくルイ 16 世の肖像画だったのでしょ²⁴⁾。

「大王」は、ルイ 16 世の逮捕現場を通り過ぎ、橋を渡ったところにある宿である。ユゴーはその宿に泊まろうとして、飾られていたルイ・フィリップの肖像画に目を止めた。下線部は 41 年の追加箇所、波線部は変更箇所である。元の文は「cette voiture royale fut brutalisée dans cette ville」と「cette voiture royale」を主語

21) OC., Tome VI, p. 211.

22) OC., Tome VI, p. 211.

23) *Dictionnaire Victor Hugo*, sous la direction de Claude Millet et David Charles, Classiques Garnier, 2023.

24) OC., Tome VI, p. 211.

にしていたが、変更後は「cette ville barra le passage à la voiture royale」と「cette ville」を主語にして、町の意志を明確にしている。また追加された壁の「古い歪んだ鉄の枝」は、そこにかつてあった王の絵と今の王の絵を結び、変化を強調するようだ。同じく、追加されたルイ 15 世、ボナパルト、シャルル 10 世はそれぞれ違う体制の為政者である。ユゴーは『ライン河』の中で、たびたびナポレオンの類語としてボナパルトを使っており、また飾られた絵も皇帝になってからのものと考えられるが、ボナパルトという単語を使うことで、帝政期に力を持ったボナパルト一族へとイメージを広げている。宿「大王」は、旧体制下、帝政下、王政復古下それぞれの大王を飾り、変化の中を生き延びてきたが、これらの王の名前は時代の移り変わりを表しているだけではない可能性がある。『ライン河』の出版直後の 1842 年 7 月に書かれたオルレアン公の事故死についての文章に注目しよう。

この件について、ここ 100 年の歴史を見渡すと、1 つ気づくことがある。ルイ 14 世は統治したが、その子どもは統治しなかった。ルイ 15 世は統治したが、その息子は統治しなかった。ルイ 16 世は統治したが、その息子は統治しなかった。ナポレオンは統治したが、その息子は統治しなかった。シャルル 10 世は統治したが、その息子は統治しなかった。ルイ・フィリップは統治しているが、その息子は統治しないだろう²⁵⁾。

ルイ 15 世、ナポレオン、シャルル 10 世は『ライン河』のために追加された名前と一致するが、こちらではナポレオンが使われ、時代を暗示するよりも皇帝としての個人に焦点があたっている。ルイ 16 世を含め、彼らは全て息子が後継者とならなかった王である。ユゴーはルイ 16 世に「交代」だけでなく「不毛性²⁶⁾」を付け加え始めているのではないだろうか。

3. 引き継ぐ者

ユゴーにとってのルイ 16 世は、世襲王政の後継者であり、血を途絶えさせる「不毛」の王で、「交代」されるべき存在であった。そのためルイ 16 世の登場は、引き継ぐ者の存在が前提となるだろう。ユゴーは、1831 年の『ノートル＝ダム・ド・パリ』で「民衆の時」が訪れることを予言し、1838 年『リュイ・ブラス』では韻文戯曲の主演に庶民を登場させ、やがて『レ・ミゼラブル』（1862）では虐げられた人々を描くことになる。ルイ 16 世の交代相手として想定されているのが「民衆 *«peuple»*」であることは容易に想像できるだろう。ユゴーにおける *«peuple»* という単語はとても複雑で、『レ・ミゼラブル』まで行けば、法や政治的観点からだけでなく社会的観点も加わって貧しき人々を指す²⁷⁾ が、『ライン河』

25) OC., Tome VI, p. 1318.

26) 後にユゴーは『九十三年』の覚書に、「Roi eunuque en présence d'une révolution à six mamelles.」(OC., XV-XVI/1, p. 53)と書き記す。後に様々な体制を生み出すことになった革命を目撃した王を、宦官という不毛性を表す言葉で表現している。

27) *Dictionnaire Victor Hugo, Op.cit.* の *«peuple»* の項目を参照。

の段階では、豊かな王侯貴族の対比として、そこに暮らす流動的な名もなき人々を示していると考えられる²⁸⁾。この民衆が交代相手であることは第4の書簡以降、明確になっていく。ライン地方への旅の中、ユゴーは王侯貴族の墓や遺構を巡る一方、そこで生きる名もなき人々を登場させる。フランクフルトの聖バルトロメオ教会に上ったときの様子を見てみよう。息をのむ美しい光景に圧倒されたユゴーは、自分以外にも教会の上に人がいることに気が付く。それはそこに住み着いている親子の姿であった。

この誇り高き皇帝の街は、たくさんの戦争を支持し、多くの砲弾を受け、多勢の皇帝を即位させました。その城壁は甲冑のようで、その鷲は両爪に王冠、オーストリアの鷲が2つの頭に乘せていた王冠を握っていました。しかし、今日、支配し、頂上にいるのは、老女のみすぼらしい住居であり、そこから一筋の煙が出ています²⁹⁾。

過去と現在が対比される。かつて皇帝が戴冠した教会の頂には、年を取った女性「une vieille femme」が住みついている。名を残した皇帝たちがいた過去に対して、不定冠詞「une」がついた、無名の老女のみすぼらしい小屋を頂上に戴いているのが、今のフランクフルトなのである。「城と修道院、貴族と僧侶は2つの廃墟³⁰⁾」であり、人々の暮らしだけが残ったのだ。

そして、この手紙が終わると42年版の最後を飾る25番目の手紙が始まる。この書簡は「ライン河³¹⁾」という表題を持ち、実際には訪れていないトーマ湖の話から始まる。3つの小川が溪谷に流れ込み、混ざりあい、トーマ湖となる。これがライン河の源流である。ユゴーは次のように言及する。

3人の羊飼いが出会えば、民衆となり、3つの小川が出会えば大河となります。1307年11月17日、民衆が誕生しました³²⁾。

ここで突然登場する3人の羊飼いはリュトリの誓いでスイス連邦を作ったとされる伝説の3人のことである。19世紀に入り、ギヨーム・テルの伝説が国際化するるとともに彼ら3人の伝説も広まっていた。現在定説とされる1291年ではなく、1307年³³⁾と記すのも、19世紀前半のテル伝説の熱を受けてのものと考えられる。ユゴーはこのスイスでの民衆の誕生をライン河の誕生と結びつけ、「3人の羊飼いは

28) Frank Laurent, *Victor Hugo : Espace et Politique -Jusqu'à l'exil*, Presses Universitaires de Rennes, 2008.

29) *OC.*, Tome VI, p. 381.

30) *OC.*, Tome VI, p. 394.

31) *La Presse* は1842年1月12日、13日の2日間にわたり、この手紙を掲載している。

32) *OC.*, Tome VI, p. 382.

33) スイス同盟加盟500年を記念する事業でスイス建国史を依頼されたヨーゼフ・コップの研究『スイス連盟史の資料』（1835年）が公にされ、テルの存在が否定される。

と3つの小川、スイスとラインは同じやり方で同じ山の中で生み出された³⁴⁾と述べる。3つのものが集まることによって完成する同じやり方、スイスという同じ山の中、こうした民衆と大河の類似性を示す。王侯貴族は過去のものであり、山奥から流れ出した民衆が下流の地域へと広がる時代なのである。しかし、現実の世界はどうだろうか。体制はこの事実に適合しているのだろうか。ユゴーは「結論」で次のように述べる。

もしも、社会の進歩が、我々はそれを固く信じるのだが、ゆっくりと継続的に平和的に1つの政府から、多数の政府へ、そして多数の政府から全員の政府へと移行していくのなら、もしそれが本当なら、一見したところヨーロッパは、良識のある人間が考えるように、進歩には程遠く、退行したことは明白である³⁵⁾。

そして、現代の問題として、ヨーロッパでは世襲王政が12から17と増え、選挙王政が5から1へ、共和国は8から1へと減少した実例を挙げる。1人が世襲する王政のみが増え、多数から一人を選ぶ王政や多数が参加する共和制は数を減らす。これを「退行」という言葉で表現している。全員の政府を評価するなら、ユゴーにとって「進歩」した状態は共和国ということになる。この評価された唯一の国こそ、民衆が誕生したスイスである。3世紀ほどの間に13州から22州に増えたスイスを、ユゴーは「生き残っただけでなく、拡大した」と評価する。しかし、そのスイスも州間での不平等があり、一流とまでは言えないと絶対的な評価を与えているわけではない。この不平等に対して、フランスは、領土内の地域間に階層がない分、今後発展していくだろうと述べて、最後に次のように「結論」を締めくくる。

外政にとってと同様に内政にとっても、国中の階級にとってと同様に、国家間同士にとっても、社会にとっても同様に国家のためにも、平和の鍵はおそらくこのたった一言の中にある。北に南の取り分を与えて、民衆に力の取り分を与えよ³⁶⁾。

南とは豊かで持てる国、北とは貧しく持たざる国のことであり、これを国内に置き換えると南は王侯貴族を指し、北は民衆を指す。ユゴーは「不利な位置にいる人々がヨーロッパの秩序を乱し、不平等にあえぐ階級が社会秩序を乱す」と忠告する。富が一極集中することで、生まれた場所が悪かった者、空腹にあえぐものが不平不満を爆発させ、秩序を乱すという。それを防ぐためには、国家間では持てるものが、持たざるものに取り分を与えること、国内では「民衆に力の取り

34) OC., Tome VI, p. 383.

35) OC., Tome VI, p. 526.

36) OC., Tome VI, p. 540.

分」を与えることを勧める。これが、ラインの左右を仏独で分かち合い、2国の協力により英露の野望に立ち向かうという理想を掲げた『ライン河』の「結論」のもう1つの主張である。

以上のような『ライン河』の「結論」を考えると、冒頭にルイ16世の最後の旅が組み込まれた理由が見えてくるだろう。最初に、世襲寡頭政治の終わりを示し、「交代」の時が来たことをほのめかして『ライン河』は幕を開ける。そして王侯貴族の遺構を静的に描く一方、そこで生活する人々を生き生きと描写する中で「交代」相手を暗示する。つまり、38年の書簡は40年の書簡のドラマティックな質を高めるためだけでなく、「1人の政治」から「多数の政治」へという、ユゴアの生きる過渡期を『ライン河』という作品全体で表現しているのだ。1845年、ユゴアは民衆の誕生の地として評価したスイス旅行を『ライン河』に追加する。これも今を動かす人々³⁷⁾を描こうとする意図によるものだろう。

(法政大学非常勤講師)

37) 1838年、40年の旅では時事について触れることはないが、1839年の旅では途中で耳にしたチューリッヒの「革命」について言及している。